



## 〈できる私の終活作戦〉

ジャーナリスト  
松本 侑壬子

自伝ブームだという。ある大手出版社では二〇〇万円で一〇〇〇部の自費出版を請け負うとか。某大手新聞社は、記者が本人へのインタビューに基づき自伝を代筆する有料サービスを始めたとともに。

高齢化の進む中で終活への関心が高まり、自分の人生をふり返って誰かに伝えたい気持ちが高まるのは、ごく自然なことだ。だから、読者には家族や友人知人を想定し、愛する者たちに自分のありのままの人生の足跡を語る——というのが一般的だ。日本では。

アメリカの場合はどうか。似ているようで違うのは、国柄の違いか、あるいは、例えば、今月の映画『あなたの旅立ち、綴ります』の主人公があまりにも個人的だからであろうか。彼女の終活ぶりを見て大笑いしたり、しんみり共感するうちに、自分という存在に対する自他の認識の違いに愕然とさせられる。

本当の自分と自分のイメージ。それは自力で変えられるものなのか。

脚本の段階から、強烈な個性派大女優シャーリー・マクレーンにあてて書かれたというだけに、嫌な女と脆さとユーモアと共感性、あふれる主人公の人物像が生きてきと迫ってくる。

広告業界で成功を収め、今は悠々自適な老後生活を送る(元)『できる女』のハリエット。何と自由な生活の中で八〇代になって孤独と死への不安に襲われる。ある日新聞の訃報記事を目にしたことから、自分が死んだ場合に備えて自分の訃報記事をあらかじめ用意しておこうと思いつき、地元紙の若い女性記者アンに依頼する。日本のマスコミでも高齢の有名人の死亡原稿は大抵用意している(ナイシヨ)。けれど、本人自らが用意するなんてあまり聞いたことがない。アンは仕方なくハリエットの周辺取材を進めるが、疎遠になって久し

い家族からかつての仕事仲間、地元教会の牧師まで、誰一人として彼女のことをよく言う者はいなかった。

アン原稿を読んだハリエットは衝撃を受け、「最高の訃報記事」に欠かさない条件①家族や友人に愛される②同僚から尊敬される③誰かの人生に影響を与える④人々の記憶に残る、の四条件を満たすことを決意する。特に④の、新聞の見出しになるような何かをやり遂げようと、自分が長年集めていたレコードのコレクションをもって地元のラジオ局に乗り込み、八一歳にしてDJデビューを果たす。最も難題と思われる①の条件をクリアすべく、ハリエットはアンを道連れに、何十年も音信不通だった娘に会いに旅に出る。だが、捜し当てた娘に感激の再会どころか気まずい空気の中で、「私の幸せの邪魔をしないで」と言われてしまう。娘が幸せに暮らしていることを知り、狂ったように笑い出すハリエット。「何だ、私はいい母親だったんだ」と。

自己中心でどこまでもできる女のハリエットの終活作戦に巻き込まれうんざり気味だったアンに、なぜか不思議な力が湧いてくる……。コミカルでもありシリアスな味わいもする、まさにシャーリー・マクレーンの作品だ。

## 『あなたの旅立ち、綴ります』

アメリカ映画 (108分)

監督：マーク・ベリントン

出演：シャーリー・マクレーン、アマンダ・セイフライドほか

公開中

© 2016 The Last Word, LLC. All Rights Reserved.

